

「子供に勉強は教えるな」

～自宅を使った小さな塾で起こった多くの奇跡とも言える
大幅な学力の向上にまつわる話と
それを実現させた、その独自の指導法のメカニズムの全容～

中川祐樹

【ある日のある出来事】

ひとつの問題がありました。

それを学力が同じ二人の生徒に解いてもらいました。
一人の生徒にはその前に徹底的に公式や解法のテクニックを教えました。
もう一人の生徒には、特になにも教えていません。
ただ、ある言葉をそっと伝えました。

結果は、前者の生徒の正答率は1割、後者の生徒の正答率は8割でした。

この違いはどこから生まれるのでしょうか？
また、後者の生徒に、どんな言葉をかけたのでしょうか？
この問いかけが、この本の目的でもあり答えでもあります。
ゆっくりと文章をかみしめながらこの問いの答え探しをしてみてください。
きっと子供たちにとって大事な何かを発見できると思います。

著者より

子供に勉強は教えるな

目次

はじめに	4
1章 30点からの奇跡.....	5
合格発表の朝	5
痛	6
彼の宣言	7
テストの成績にはなんの意味もない！	8
「教わる」という海に溺れかけている子供たち.....	9
2章 オレ流の指導法	11
オレ流の指導法.....	11
子供達の変化	13
「教えない指導法」により得られた子供達の変化のデータ.....	14
子供が本来持っている力を奪わないために.....	16
指導法～家庭編その～	19
指導法～家庭編その～	21
指導法～家庭編その～	23
指導法～家庭編その～	24
「教わらなくてもできる」学習の進め方.....	26
「教えない指導法」簡単チェックリスト.....	30
最後に.....	32
冒頭の話の子供にかけた言葉。	33

はじめに

この本の表題をご覧になって、驚かれた皆様は多いことだと思います。昨今の日本の教育事情と言え、ゆとり教育による学力低下を心配するPTAが行政側に働きかけたり、子供を早いうちから進学塾に通わせる率が上昇したりしている現実があるから、よりいっそうこの表題（「子供に勉強は教えるな」）には驚かれたことだと思います。しかし、「子供に勉強は教えるな」という題を私がこの本の題名に選んだのは、2つの理由があります。

1つめとしましては、ゆとり教育の反動で過熱する知識偏重の教育ブームの時代の流れに対する警鐘として、2つめは、文字通り「子供に勉強を教えないほうが子供の学力は伸びる」という私の指導経験に裏打ちされた研究結果を発表するための本にしたかったからであります。

でも、「子供に勉強を教えずに、子供の学力が伸びるなんて信じられない」と思われる方がほとんどだと思います。

この質問の答えは、この本の中に書いてあります。この本に書いてある全ては、熊本県の田舎町にある自宅を使った小さな学習塾で起こった奇跡的で、価値のある研究結果に基づいて書かれています。100点満点のテストで、全教科30点位だった生徒が、熊本県の難関エリート進学校である済々黌高等学校に合格した体験記もこの本のなかに書かれています。

この本は、既存の教育書とは異なり、教育学や教育論、そして教育心理学などをベースに書かれてはおりません。私の経験を基に帰納的に論理を展開しております。難しい言葉は極力使わないようにしたつもりですので、この本は、特に小中学生のお子様をお持ちのお母様方にお読み頂きたいと思っております。お母様方の教育のバイブルのひとつになることができたらうれしく思います。「教えない」指導法ですので、是非ともお母様方には気軽に実践して頂きたいのです。

また、「子供が勉強しない」、「子供の成績のことが心配」、「どうやって子供の意欲を高めたらいいのかが分からない」と不安に思われている多くのお母様方に向けた、応援の本として、「教えない」という観点から独自のヒントを散りばめたつもりです。

子供に勉強を教えないとはどういうことか、その意味するところは、一言では書いておりません。最後まで読み終わったときに「あ、そうか」と思っていただけのような構成にしてあります。

また、教育関係者の方、そして現役の小中学生の皆様にもお読みいただき、すこしでもなんらかの形でプラスになることができれば幸いです。

著者 中川祐樹

1章 30点からの奇跡

合格発表の朝

合格発表の朝、私は妻を連れて高校近くのファミリーレストランにいました。まだ朝の7時頃だったと思います。モーニングセットを注文したものの、覚えているのはそこまでで、そんなに大事な朝なのに、妻とどんな話をしたのか、自分がどんな気持ちでいたのかさえ覚えていません。ただ、緊張するとおなかの調子が痛くなる質の私は、何度もトイレにいったことだけは覚えています。

そのファミレスはその高校からすぐ近くということもあり、時間がたつにつれ、お父さんやお母さんにつきそわれた子供たちが店に来て、神妙な面持ちで席に座って朝食をとっていました。その光景がまた私の緊張を高め、心臓の鼓動が高まってきました。気がつくと時計の針は8時45分になっていました。そろそろ高校の校舎に合格者の受験番号が貼り出される時間です。私たちは席を立って、高校のあるほうに歩いていきました。

その高校は、熊本県でも人気が一番高い難関高校ということもあり、合格発表を見にきた親子連れの車と朝の通勤ラッシュが重なり、道は渋滞していました。ちょうど校門の前に来たときです。私は、どうしてもその高校の校舎内に入ることができませんでした。自分自身が若かりし時の合格発表の緊張感とは全然違い、その緊張といたら自分で不思議に思えるほど私をガチガチにしていました。妻は冷静で、私を急かしましたが、私はどうしても入ることができず、結局引き返してきてしまったのです。なさけないと思いながら、妻に生徒の受験番号を伝え、あとは妻に任せました。私は、小走りでなぜか逃げるように校門の坂を下って再びファミレスの方に行きました。そしてファミレスに着いたとき、時計はちょうど9時になっていました。合格発表がされている時間です。私は、その生徒には悪いのですが、「無理だ。無理。絶対無理。あの成績から合格できた人なんていたことないんだから。無理。」と何度も自分の中で繰り返し、自分自身の不安とたたかっていました。

時間が過ぎていくのがこれほど長く感じたことはありません。携帯電話を握り締め妻からの電話を待ちました。窓の外を見ると、思いっきりの笑顔で家族に携帯電話で連絡をしている男の子を目にしました。合格発表はもうされはじめたのです。でも私の携帯電話は鳴りません。また外を見ると、泣きながらお父さんに肩をだかされている親子を見ました。その時、私は、生徒のこれまでの成績が頭の中を駆け巡りました。そのどの成績にしても合格の可能性はみえないのです。だめだ。ため息をつきました。どう考えても電話がかかってくるのが遅いのです。私は握り締めていた携帯電話をポケットにしまいました。

痛

私は、レジで会計を済ますと、駐車場に向かい車に乗りました。エンジンをかけて妻がくるのを待ちました。電話はもうあきらめていました。そうしてなんともいえない重い気持ちで車のラジオのスイッチを押しました。流れてくるポップ音楽は、しずんだ気持ちの私とは無関係に、明るい声を響かせていました。すると突然車のドアを軽くたたき妻がいました。私は妻の目をみようとはしませんでした。妻は声高に何か言っているようでした。私は右手のスイッチで車のウィンドウをおろしました。すると妻は「あんたなんばしょっとね！合格してたよ！」と窓の外から言い、車から降りるように私に言いました。一気に言われたものですから、それまで空虚感の中にいた私は、妻の言葉をきちんと理解する間も無くそそくさに車から降りて、妻に聞き返しました。「え？合格しとったと？」周りに迷惑なくらい大声だったと思います。「しとったよ。どこに行とったんね～」妻はちょっと怒り気味でそういいました。「いや、見間違いじゃないね？」人に任せておきながら勝手なものです、私は、もしかしたら受験番号の見間違いを妻がしているのかもしれないと思い、何度も聞きました。妻は言いました。「じゃあ、ゆうさんがみてきなっせ！」私は、歩きました。高校に向かって歩きました。早足で人ごみをかきわけて行きました。まるで徒競走の選手のように。先ほど躊躇していた校門に入り、合格者が貼り出しているところまで行き、受験番号を目で追いました。ありました。間違いなくありました。合格していたのです。でも、何度も何度も見ました。やっぱり彼の番号があるのです。夢のようとはこのことを言うんだと思いました。しかしそれでも信じられないのです。私はほっぺたをつねりました。思いっきりつねりました。とてもとても痛かった。そこでやっと私は彼が合格していることを信じる事ができたのです。涙が次から次にあふれてきます。周りは合格発表の日の会場という騒然とした雰囲気なので、恥ずかしさなどはありません。思いっきり泣きました。校門を出て、車に向かい、妻のもとに行き、疑ってしまったことを謝って、あとはもう「ありがとう。ありがとう。」妻に向かって何度も言いました。涙と鼻水でぐちゃぐちゃになっている私を妻は笑いながらも「よかったね！」と言ってくれました。

私が、これほどまでに喜んだ理由は、彼の中学校1・2年生の時の成績と彼との格闘の日々があったからなのです。

彼の宣言

彼との出会いは彼が中学1年生の夏休みでした。入塾して間もなくは、授業中におしゃべりしたりして集中力が続かず、どうにかして勉強に集中させなければいけないなと思っていました。お友達と学校以外の場所で一緒に勉強できることがとてもうれしいといった感じでした。授業中におしゃべりをして私から注意されることも少なくなかったのですが、いつでもとても素直な目をしていたのを覚えています。その授業中のおしゃべりもしばらくすれば徐々にですがなくなっていきました。

学校でのテストの成績は入塾してすぐに見せてもらうようにしていますので、彼の成績も覚えています。全教科100点満点中の30点位でした。点数自体はおせじにも決して高いとは言えませんが、どの教科もすべて30点位というふうにムラがなかった事と、指導をしていて理解から定着までのスピードが若干ですが速いと感じたので、ある程度までは短期間のうちに伸びていこうと判断をしていました。彼はとても塾を楽しんでいましたので、勉強自体も楽しみの一つとして意欲的に取り組む姿勢があり、塾の中ではよい点数のグループではありませんでしたが、自分は自分という感じで筆を握っていました。入塾から3ヶ月位がたち、厳しいことで有名な野球部と両立しながら勉強をしてはいましたが、成績は、私が最初に判断し予測したようにはなかなか伸びませんでした。彼は英語には興味を持っていたので英語のテストは点数が以前よりはとれるようにはなりましたが、全体的あまり成績が伸びてきませんでした。

そんな彼の成績がしっかりとした形で伸び始めてきたのは2年生の7月の期末テスト位からでした。つまり入塾して1年が経っていました。それまでは、ある程度の良い点数を取ることはあっても、細かな質問を私がするとちょっとした基本的な間違いをすることがありましたが、この7月のテストの時は、細かな部分がしっかりと理解できているようでした。そうして、7月の期末テストが終わったころでした。ある日、彼は、私に言いました。「僕、済々黌に行きます」そう宣言したのです。

私は、彼がいくらその前の月のテストで成績が伸びたとはいえ、あまりに難関すぎる高校の名を口にすることにびっくりしましたが、私は言いました「行きたいなら行きなさい。」あまりにそっけない私の言葉だったかなと少し感じましたが、あとあと考えればそれでよかったのかなと思っています。その高校がどんなに難しい高校なのか、今君の偏差値はこれこれだとか、どんな勉強をこれからしていかなければいけないのかなど、あまりに子供にとって現実的な話をするにはタイミングがあると思うのです。もしあのとき、今までのデータを見せて、「君は今このラインだから。希望している高校に合格するためには〜」などと話していたら彼は自分は無理だと早計に判断してしまいかねません。今でも実力よりかけはなれた志望校を口にする生徒がいますが、私は否定も助言もしません。「行きたいなら行きなさい」余計なことは言わず、ただ真剣なまなざしでそう伝えます。

テストの成績にはなんの意味もない！

そして、彼が私に「塾長、僕済々黌に行きます」と宣言してから、入試まではあっという間に過ぎました。入塾した時の彼の成績は全教科100点満点中の平均30点でした。つまり学年では200番前後だったのです。その彼が最終的に学年でトップ20人に入るようになり、難関高校に合格することができました。

私は、この彼の例を通して、全国のお母様方、教育関係者の方々に一番言いたいことは、子供の力を学校のテストで判断するようなことはしてはいけないということです。子供はその指導如何によっては、信じられないような学力向上を達成します。読者の皆様の中には次のようなにお思いになられた方が多いかもしれません。「彼は特別にやる気があったんだろう。だから特別な例として考えなければならないのではないか」しかし、やる気のある子供が全てこのように大幅な学力を開花させることができるのでしょうか？また、やる気が芽生え、それを持続させることは実際問題としてかなり難しいことは教育現場におられる皆様ならご存知だと思います。そして、彼を例に話をすすめて参りましたが、同様に学力を大幅に伸ばしている子供達を私は多く見てきました。ここでご承知いただきたいことがひとつあります。それは、このような大幅な学力向上は、私の塾の指導方針のもとだけで実現できているということでは決してないということなのです。日本各地でこのようなことは起きているのです。ただ、そのような子供達は、一般的に「人一倍やる気が強い子だった」や「彼はもともと頭が良かった」などとして論理づけられてきたのです。しかし、そのような結論付けは、結果論であり、その子供達の学力が伸びている過程や環境にはあまり注意がむけられてきませんでした。

私はこの本で、教育者としてどのようにすれば子供達の能力を適切にかつ十分に引き上げることができるかを実践的な経験に基づいてお話させて頂きたいと思っています。学問に王道はありません。学問において目的を達する為には、ひたすら地道に勉強をするしかないことに皆様異論はないと思います。経済的に余裕があるなら家庭教師をつけてマンツーマンで学習するのが一番いいと信じて疑わない方もいらっしゃるかと思いますが。私はあえて反対の立場に立っています。そうです、「子供に勉強は教えるな」という立場に。

「教わる」という海に溺れかけている子供たち

子供達は、勉強は教わるものだと思って疑いません。親もどこの学校・塾に行けば一番成績を伸ばして志望校に合格させてくれるかを考えます。私はそこにこそ一番危惧を覚えています。つまり、義務教育で育ってきた子供達は、学校という受け身のシステムの中にどっぷりつかって中学生・高校生になるわけです。なぜ学校が受け身かと言えば、授業形式だからです。子供達は始業のベルが鳴ると席に座ります。そして先生がドアから入ってきて授業を始め、先生の指示で教科書を開きます。黒板に書いた文字を写し、先生から当てられればそれに答えます。このスタイルで、最低でも義務教育の小中学校9年間は勉強をするわけです。いわゆる「指示待ち族」といわれる大人が増えているのもうなずけるわけです。また、学歴社会が崩壊しつつある現在、将来社会で必要とされるのは、高学歴であるよりむしろ客観的な思考で状況判断を的確にし、自分で物事を決めることのできる人材です。残念ながら日本の義務教育現場ではそういった教育が十分に行われているとは言えません。学校で教師達はどのように教えるかに力を注いでいます。塾でも同様に、教えることの上手な先生が生徒達の信頼を集めます。私はその教えることに熱心な先生達を非難しようなどとは微塵も思っていませんし、私の言いたいことはそれとはまた違った層で展開すべきものだと思っております。それは、現実問題として高校に合格させたいと願うのは親なら誰しも当然のことですし、それに応えようと子供の能力を伸ばしてあげたいと努力している先生方の苦勞は計り知れないものがあるのは承知しているからです。ちなみにアメリカでは、小学校の時から多くの小中学校が討論形式の授業スタイルをとっています。子供達が十分に考えるということをしなごらひとつのことを学び取っていく訓練をしているわけです。

私はこの本で、日本の教育システムを変えてアメリカ式にしようなどといったことまでは言うつもりはありません。それは今出来ることは何かを考えることが、今日の前にいる子供にとっては先決であり重要だからです。今日の前にいるこの子供に、将来日本を支える主体的に行動できる立派な人間になって欲しいと思い、同時に、その子の能力を大きく引きだし成績も伸ばしてあげたいと望み、そのふたつをうまく両立させることはできないかという気持ちで私は自宅を使って塾を始めました。そして私は試行錯誤しながら自分なりの指導法をつむぎだしていったのです。それが、この本の題名にもある「勉強を教えなくて子供の能力を高める指導法」です。この指導法は、私が思っていたよりも効果を上げ、成績が大きく伸びるという現象を続出させました。私は、驚きとともに、そこで強く感じるものがありました。それは、子供たちは教わるという状況の中で飽和しているということです。ほとんどの教育現場では、子供の学びたいという気持ちを、指導者の「教える！」という気持ちが大きく上回ってしまっているのです。子供たちは教えなくても学ぶ力は持っています。指導者のすべきことは教えることではなく、子供たちの学ぶ力をひっぱり

だすことなのです。子供たちを自由にして、海に放してあげてください。子供たちは実に見事にそれまで見せなかった自由で独創的な泳ぎをみせてくれることでしょう。

2章 オレ流の指導法

オレ流の指導法

私が塾で実践している、既存の指導論にとらわれない、経験的な指導法を私はあえて「オレ流の指導法」と呼んでいます。

この章では、私が塾で実践しているその「オレ流」とはいったいどんな指導法なのかを、お話させて頂きたいと思います。

私は塾でほとんど教えることはありません。この「ほとんど教えない」というのは、学校や他の多くの進学塾と比較してということです。もちろん教えるべき時にはしっかりと指導します。しかし積極的には指導していません。生徒が本当に知りたいとき、もしくは生徒が本当に知りたい時だと私が判断したときのみ教えます。自分で考えるということが習慣づいていない子供達には、単にやみくもに教えればよいというのではないのです。教えるタイミングが非常に重要で、十分に考えずに質問をしてくる生徒には、もう少し考えるように促します。また質問をあまり自分のほうからしない生徒もいます。そのように質問をするのが苦手な生徒には、その子の学習している様子をより注意深く観察する必要があります。無理に「質問をなさい」と言っても、彼らは形だけの質問をするようになってしまいますので、指導者が十分に注意深く彼らの内面を見極める必要があるのです。筆がとまっている時間が長くはないか、思考が固まって肩が緊張していなか、注意力が散漫になってはいないかなどを私は目安にしていますが、この子供が理解に苦しんでいるというサインは生徒によってひとり一人異なりますので、その子の性格や学習の癖を指導者があらかじめ十分に把握している必要があります。子供が十分に考えた結果、分からないと判断したときに初めてその理解していない部分に絞って教えるのです。入塾して間もない生徒は、そういった、先生がどんどん教えないという環境は初めてですので、最初は集中力を欠いたり、ぼんやりとしたりすることもあります。しかし、そんな時も私は何も言いません。子供は塾に勉強をしに来ているという自覚はあるのです。ただ「勉強＝教わること」がすべてだと錯覚しているために、ぼんやりしたりするのはです。そのような生徒には、「今日の最後にここのテストをするよ」とひと言伝えるだけで効果があります。勉強をなさいというよりも、テストをするからという小さな目標を与えてあげるだけで子供はおのずから意欲を出すだけでなく、徐々に、勉強というのは教わることだけではないんだということに気がつき始めるのです。この最後にテストがあるというスタイルに慣れてく

ると子供たちは、塾にきたら、すぐに勉強をはじめます。そしておおざっぱだった質問も、だんだんと的をついたいい質問をするようになってきます。そしてさらになじんでくると、私が最後にテストをすることをしないで、子供たちは自分なりの学習スタイルで集中して勉強をします。「では塾では具体的にどんな課題をさせているのか」とお思いかもしれませんが。私は、子供にやらせるその日の課題は半分は子供に決めさせて半分は私が決めるようにしています。子供に今日何をする？と聞くのです。そのときに、子供は自分の好きな教科をしたいということが多く、たとえそれがまじかに迫っているテストと関係のないところ、もしくは今はこの子は別の部分をしたほうがよいと教師側が思うような部分ではない場合であっても、子供の意見を尊重します。せっかく子供が自分からここがしたい！と言うのです、それを聞き入れずに、塾のカリキュラムなどばかりにとらわれて、こちら主導で進めることは、子供の意欲を損ない、学習をマンネリ化させてしまいます。まずは子供のしたいことを聞き入れてあげて、その上で、その子の学力や進み具合に応じてこちらが判断した適切な課題を与えるようにすれば、子供たちは納得した上でスムーズに学習をスタートさせることができるのです。以上が「オレ流の指導法」の大筋です。重要なことは、子供は自ら学ぶ力を持っていると信じてあげること、そしてその力を発揮できるような下地を指導者が用意してあげるといふことの2点につきるのです。指導者側が意気込んでいい授業しようなどとする必要はもうありません。子供の自ら学ぶ力を育てひとり一人の意欲をうまく引き出すことだけに力を注げばいいのです。教育者＝教えることがうまい人などという定義はどこにも存在しません。知識の伝達だけでなく、子供に本当の力をつけさせることが、私たち教育に携わる人の願いではないでしょうか。

子供達の変化

この教えない指導法によって、子供達がどのように変化を見せるのかを、ここでは書きたいと思います。

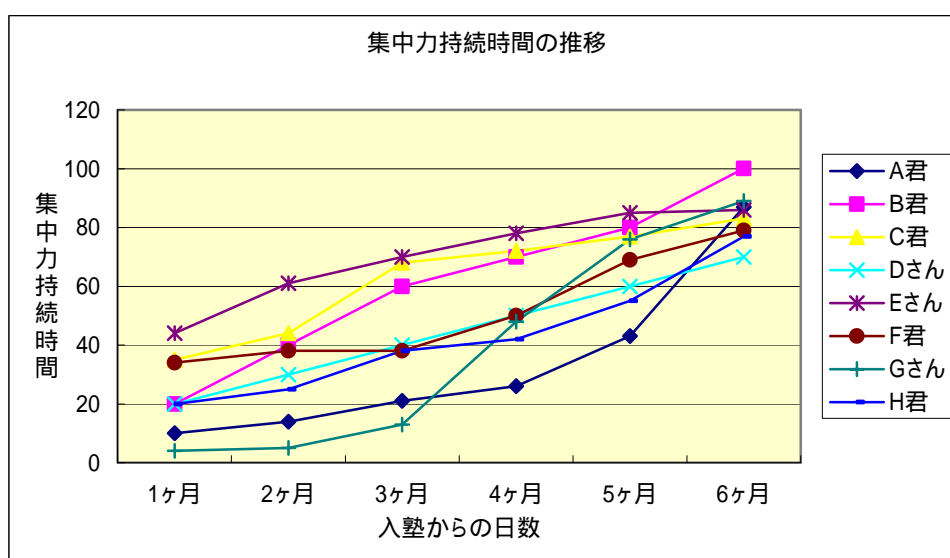
塾に入塾して間もない生徒さんは、途中で集中力を欠いたりすることがあります。なにをすればいいんだろう?という感じです。自分のやるべきことを自分で考えてそれを実行しさらに持続させることは、結構難しいからです。そんな時でも、私はなににも言いません。ただおしゃべりをしだしたりするような他人に迷惑をかける場合は、厳しく叱ります。しかし、集中力を欠いている場合や主体的な学習をどのように進めればいいのか迷っている時も私は、特になににも言いません。うちの塾ではひとこまが90分なのですが、その90分をまるまるボーっとしたような状態で終わる子もいます。みなさんは、どう思われますか? 「課題を与えたり、これこれをしなさいといったほうがきっかけになっていいのではないか」と思う方もいらっしゃるかもしれませんが、しかし、主体的な学習をしなさいと言われて、すぐ実行できる子供などいないのです。やはり時間がかかるのです。子供達は主体的な学習をすることができるようになるまで、私は、必要最低限の事しか言いません。そうするとどういう現象が生まれるかといいますと、子供達は、「無駄」という概念に突き当たるのです。人間は本来無駄なことに対する拒否反応を示す動物です。「無駄」という概念を持ち合わせているのは人間だけです。それは時間というものを意識できる存在だからだと思いますが、いずれにせよ、子供が、その「無駄」だと感じることはきわめて重要で、それがなければ主体的な学習どころか、時間を活用するという段階までたどり着かないのです。だから、私は待ちます。たまに、本人にはいやみに聞こえるかもしれませんが、ボーっと過ごした生徒に対して、「いつもよく頑張ってるね!」と声をかけることもあります。それは、自分がやっていることと私の認識との落差を感じてほしいからです。そして、本人が「無駄」だと感じたら子供達は次のステップに移ることになります。その次のステップとは、無駄に気づいた子供達は、時間をどうにか活用しようとするのです。自分で教科書を読み始めます。自分でテキストを要望するようになります。自分で自分のしたい分野のプリントをコピーするのです。自分で質問をしてきます。私が授業をする時も目の輝きが違います。子供達は、自分が時間がある意味管理でき、うまく活用できていることに達成感と喜びを感じ始めるのです。そのような状態に一度至った子供は、もう時間を無駄に使うことはしません。たとえ、気持ちの緩みでそんな時があったにしても、すぐに時間を有効に使う方向へと戻ります。このようにして、子供を主体的な学習ができるようにもっていくことが私達教師の大きな役目のひとつなのです。

「教えない指導法」により得られた子供達の変化のデータ

ここでは、「教えない指導法」の実践の結果得られたデータをグラフを交えてご紹介したいと思います。

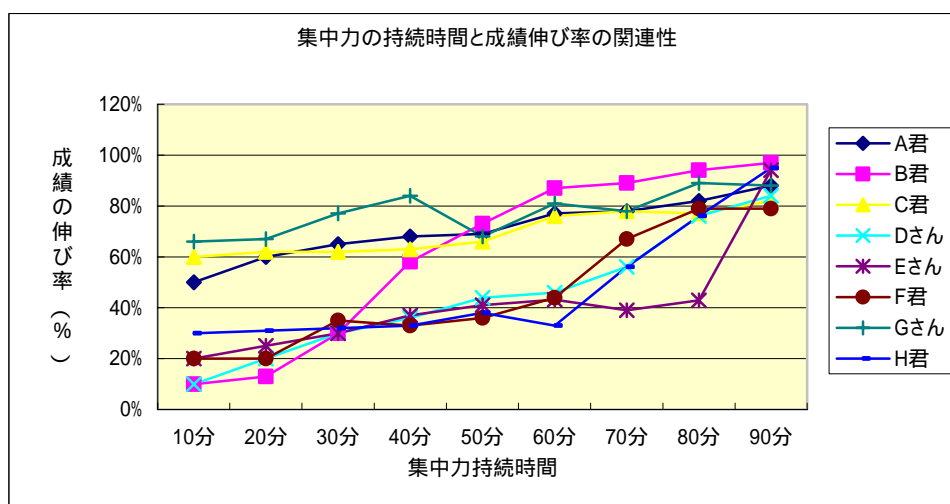
集中力持続度

子供達は、「教えない指導法」によっていろいろな変化をみせますが、その中でも顕著に現れるのが、主体的になってくるに従って、**集中の持続時間が長くなっていく**ということです。私は、集中しなさいとは言いません。しかし、子供達は、先ほど申し上げた、時間を有効に活用したいという人間本来の「自覚」が芽生えてくると、徐々に、学習に自ら集中をするようになります。その集中は、強制されたものではありませんので、**純粋な集中**です。その集中は、日ごとに長くそして深くなっていきます。下のグラフをご覧ください。入塾してから6ヶ月間の生徒の集中の持続時間の推移を表したものです。これを見て分かるのが、入塾してからの期間が長ければ長いほど、集中力の持続時間が長くなっていくということです。一見あたりまえのように思われるかもしれませんが、そうではありません。やらされているという意識で学習をしている子供は、それは**純粋な集中**ではありませんので、苦痛を感じたり、通塾期間が長くなってもなかなか集中力がつかないことが多いことは、他の塾から私の塾を訪れられるお母様の声によって私が感じているところであります。



成績の向上度

次に、集中力が持続できていくことと成績の向上度との関連性についてのデータをご紹介します。下は集中力の持続時間と成績の推移のグラフです。ご覧になられて分かりますとおり、この2つは比例しています。これも当たり前のように感じられるかもしれませんが、実は、面白い結果になっているのです。ある生徒さんが私の塾に来られました。その生徒さんは、家庭教師を週に3回、一日2時間つけて、1年間学習をしてきたにもかかわらず成績の伸びが見えてこなかったということでした。しかし、私の塾でおあずかりしてからは、家庭教師をされていたときのようなマンツーマンでの指導はしていません。ほとんど教えることはしていません。しかし、彼女は、「教えない指導」のもとで、「集中すること」を自分の力で体得したのです。成績も結果として伸びていきました。あくまでこれはひとつの例ではありますが、このような経験を私は数多くしていますし、思い当たるふしがあるお母様方もいらっしゃるのだと思います。私が言いたいのは、成績は、学習スタイル（個別指導・家庭教師・一斉授業）などではなく、本人の「気づき」にかかっているということなのです。その「気づき」というのは、「無駄」ということの発見であり、また自分でどうにか時間を活用したいと欲するその気持ちのことです。それが根底に流れていなければ、どのような指導を受けても成績はつきにくいものなのです。そして、最終的に、私の経験とこのデータから言えることは、**成績の伸びは、純粋な形の集中力の持続時間に比例する**ということであります。繰り返しになりますが、集中力はつけさせるものではなく、自主的な形で表出する純粋な行為でなくてはなりません。



子供が本来持っている力を奪わないために

この章までお読みになられてどのような感想をお持ちでしょうか。

「このような指導法で良い勉強はできるのかもしれないけれど、やっぱり親としては目先の定期試験の成績が伸びることや入試のほうが大事。」とお思いの方はいらっしゃいませんか？

確かに、定期試験を目標にして、試験に出やすいところに的を絞って、何度も何度も指導者が徹底的に教えれば、成績は伸びます。私自身も、そういったご要望を保護者の方から頂いた場合は、ご家庭のご要望を忠実に実行して、試験前は毎日呼び出して特訓をします。塾の役目は、ご家庭の意向を十分に塾の指導で反映させることも、とても重要なものだ考えるからです。

しかしながら、こちらが意気込んで教えた結果として子供の成績が伸びたとしても、それは子供の本来の能力を活かしたものではありませんので、その後のテストでも先生の力を借りなければなりません。そのような指導を受け続け、受験までは学年で上位にいる生徒もいますが、そのような生徒は本来の能力を発揮させる訓練をしてこないで、周り（指導者）の力に頼って上位をキープしてきたわけですから、合格する可能性は格段に下がります。

結局、入試では、小手先の器用さよりも、本来の能力＝実力が問われるのです。実力は、周りの力だけでは絶対につきません。子ども自身が自分で培っていくしか他に道はないのでここで、あることにお気づきの方もいらっしゃるでしょう。それは、学年で常に上位にいる、成績が良いと言われる生徒達は、全てと言っていいほど、自分なりの学習スタイルを確立しているということです。つまり、彼らは教わることをそれほど重要視していないのです。勉強とはどのように進めるべきものを自分の学習の経験から学びとり無意識に実行していますので、塾や家庭教師も受けずに、いい点数をとってこくこともめずらしくありません。裏を返せば、彼ら（＝成績がいい生徒たち＝勉強は教わるのがすべてだと思っていない生徒たち）は、どこの学校に行こうと、どこの進学塾に通おうとも、しっかりとした勉強ができることを知っています。したがって、あまり目先の事ばかり考え、教わることばかりを重要視すると、子供はいつまでたっても自分の能力を使おうとしません。その結果として、学習において最も大切な、「考える力」は、衰えていってしまうのです。入試など総合力が問われる問題に対応できるためには、自分の能力を使わない手はないのです。同様に、教わることばかりに頼らない、主体的な学習法を身につけたほうが、遠回りのようで、成績を伸ばすためにも、実は近道なのです。いいですかみなさん、繰り返しになりますが、「勉強＝教わるもの」という考え方ときっぱりおさらばしてください。

保護者の皆様や指導者の皆様が、このことを共有していただければ、子供は自分の力を徐々に伸ばしていきます。ただし、「教えない」というのは、「子供をほったらかしにしておく」とは全く対極にあるものだということをご理解下さい。逆に、子供に積極的にかかわろうとすることが私の指導法なのです。「教えない」ということも立派な指導法のひとつなのです。

本書を最初からお読みいただいている皆様は、いかに私の指導法が、子供に積極的にかかわろうとしているかを感じていただいていると思っております。また、ここで本筋とは少し離れますが、私がこの指導法を皆様に伝えるにあたり、述べておく必要がある私の私見について書かせて頂きたいと思えます。

「どうにか学力を上げて、志望校に合格させたい」というお母様方の強い思いと、実際我が子が勉強を思うようにしてくれないという溝の中でお悩みの方もいらっしゃると思います。しかし、お母様が、子供が将来しっかりと自立した大人に成長されることを望まれていることは一番の共通のおもいだだと思います。例えば中学校というわずか3年間でお子様を見るのではなく、大きなスパンで子供たちを見て頂きたいと切に願います。つまり、子供の人生は小中学校だけで決まるわけではないのです。その場しのぎの学習を無理に押しつけるのではなく、子供の意志を尊重して、次につながる学習ができるような環境づくりをしてもらいたいと思えます。子供はこれから成人式を迎え、働き、いろんな面で自立し、結婚して、親になっていきます。勉強というのはそれ自体には意味はないと私は思っています。勉強を通して何かを学ぶこと、勉強を通して主体的に考えることのできる大人に成長していくことこそ最も大事なことでないでしょうか。それが私の指導理念の根っこにあるものなのです。私は、自分の指導法に自信と信念を持っています。その指導法のもと、多くの生徒達が大きく成績を伸ばしてきたという自負もあります。ただ、私の指導法は他の様々な教育書と同様万能薬ではありません。私の指導法から少しでもヒントを得ていただき、それを必ず実行に移すことをしていただけるならば、お子様が自分の能力を発揮する時がきつときます。それは高校生になってからかもしれませんし、彼らが大人になってからかもしれません。また親である私たちはそれを信じることもとても重要だと思います。学歴社会が崩壊した、東大に入れば幸せになれるという時代は過ぎ去ったと言われていますが、学歴社会が根強く残っているのも事実です。ですから、いい高校、いい大学に行かせてやりたいというお母様方の気持ちは、至極賢明な考えであり、私も否定はしません。ただ、自分の子供の適性を見極めることも親として重要なことなのではないのでしょうか。

こういう例があります。学習する意欲が低く、点数もひとけたを取ってくる生徒がいました。お母様は心配され私のところに来られたのですが、私は、あらゆる観点から彼にとって適切と思われる様々な指導をして、彼の能力を開花させようとしてみました。しかし、彼は点数を伸ばしていくことができませんでした。そんなある日、彼はノートの裏に落書き

をしていました。それを見た瞬間、私は彼の絵を描くことに関する可能性を感じました。早速、知り合いの絵画教室の先生に彼を紹介したら、彼はやはり絵の才能があり素晴らしい絵画的観察力があるとのことでした。そして彼は、成績はそれほど伸ばすことはできませんでしたが、高校生になった今では、絵の才能を存分に発揮させ以前よりも明るく高校生活を送っているそうです。もしあの時、周りが、勉強、勉強と彼の勉強のことばかりに目をむけていたとしたら、彼は将来の人生において、自分は勉強ができなかったという経験にとらわれ、何事にも自信をもてない大人になっていたかもしれません。つまり、私が言いたいことは、子供には実に多くの可能性が眠っているということです。それを適切に引き出してあげるのが私たち大人の役目なのです。普段から、「勉強」だけで子供の能力をみて、この子はできる、できないと判断してはいませんか？勉強ができるということだけが子供の可能性ではないのです。本人とご家族が望まれる志望校まで、どうにか生徒の能力を引き上げることが私の役割ですが、上に述べたように、子供の可能性を勉強だけに限定せず、彼らのいろんな面を注意深く観察することもとても重要な役目だと思っております。

話は少しそれましたが、「教えない」指導法により、普段気づかない、広い目で子供たちを見ることもできるのです。さらに、前章で述べた、子供に期待する目を一度捨てて、子供に接することができれば、子供の隠れた可能性を発見できることでしょうか。また、子供は勉強以外のことであっても、自分の可能性を見いだされそれを自覚すると、意欲を刺激され、遠回りですが、学習の意欲を高めることにもつながるのです。

お母様の役割とは

この章では、お母様たちがご家庭でどのように子供に勉強に関して指導すればよいかを書いていきます。「私はもう小中学校の勉強は忘れてしまった」というお母様も多いと思います。でも大丈夫です。「子供に勉強を教えない」というのが私の指導法なので、勉強に関する知識などがなくても子供に勉強を指導することは必ずできます。「勉強＝教えるもの」という方程式から一度離れて、子供の力を信じて、お子様の隠れた力を信じてあげてください。

では、以下に順を追って説明してまいります。

指導法～家庭編その 一～

勉強部屋の整理整頓から始める。

お子さんの部屋をのぞいてみてください。学校の教科書、さまざまなプリント類、以前に買ってしなくなった問題集、文具などが雑多に散らかってはいませんか？子供の部屋は、その子供の内面を現しています。学校の勉強が分からなかったり、学習の消化不良を起こして頭の中がきちんと整理されていないときは、えてして机の周りも乱れています。ここで注意していただきたいことは、お母様は手伝ってはいけないということです。子供にさせてください。子供はいかに整理整頓することが難しいか実感しますし、お母様はいかに子供が整理整頓が上手にできないかを知ることができるはずで、子供が片付けが終わった時にお母様の出番です。細かくチェックしてください。チェックポイントを書いておきますので、お子様と一緒に確認しながらチェックをしていってください。

整理整頓のチェック項目

- ✓ 使用頻度の高いものから順に近くに置いてあるか。
- ✓ 机などの引き出しはきちんと整理されているか。
- ✓ もうすでに使うことのない以前の学年の教科書や参考書やテキスト、そして古い予定表などが目につくところはないかどうか。（使う可能性が低いものはまとめてどこかにしまうようにして下さい。必要なものだけに絞って並べるようにして下さい）

以上の3項目を中心にチェックをしながら、もしできていないようなら、「またあとでお母さん来るからね」と言って、子供にもう一度させてください。大事なものは、必要なもの以外は机の周りに置かないということです。以前に購入した、高価な百科事典などが並んではいませんか？それも使うことがないのなら思いきってどこかにしまっておいてください。そして机の周りが整理されたら、プリント類が入るような3つの箱を用意してください。ラジカセなどが入っていたダンボールでも構いません。そしてその3つの箱それぞれに「必要なプリント」「必要でないプリント」「まだわからないプリント」と紙などに大きく書いて貼り付けて下さい。子供たちは、本当に多くのプリント類を学校や塾から持ち帰ります。子供たちは一度やったプリントには目もくれようとはしません。しかし、一度やったプリント程大事なものはないので、問題をやりっぱなしにするのではなく、あとで試験前などに復習できるように「プリントの分別」の習慣をつけさせて下さい。そしてその箱は学期ごとまたは定期試験ごとにまとめて処分していくようにして下さい。

以上が、勉強部屋の整理についてです。至極当たり前のことなのですが、机の周りは実用的でかつシンプルな状態になっているように定期的にチェックをしてあげてください。子供は自分の部屋などをあまり見られるのを嫌いますから、お母さんがチェックをしにくる前に片付けるようになります。そのためには、嫌がられても子供が整理整頓をするようになるまでは、粘り強くチェックをするようにして下さい。

指導法～家庭編その ～

2. 「勉強しなさい」とは絶対に言わない

子供にとって「勉強しなさい！」という言葉は、小学生に入学して以来あまりにも聞き慣れすぎて全くというほど効果がありません。お母様たちが子供に勉強してほしいという気持ちは重々承知しております。しかし、「勉強しなさい」という言葉ひとつで、自我が芽生え始めている一人の人間である子供を動かすことは難しいことなのです。もし皆さんが会社の社長に年がら年中、「働きなさい、働きなさい」と言われたらどうですか？おそらく心の中では「分かってる！」と子供と同じ反応をするはずです。働くこと自体がいやになってはきませんか？また、「勉強はしたの？」もあまり良くありません。そう子供に言うということは、たいていの場合最初から親が、子供は勉強していないのではないかと思っ

ているからなのです。くどいようですが、社長さんからあなたが「今日はきちんと働いたか？」などと言われたら、いい気持ちはしないはずですし、信頼されてないと感じるあなたは、社長に対しても信頼感を持つのは難しいでしょう。また「勉強したの？」という親の言葉に対して特に思春期の子供は「後でする！」そして時には、「さっきやったから」とその場逃れの言葉を発してしまいます。子供は自分がそうやってしまった言葉自体によって、重たい負い目を自分自身に対しても感じ、それが積み重なれば、逃げ場がなくなり苦しくなって、結局は学習意欲を低下させてしまうこととなります。

では、いったいどのような言葉をかければよいか？といいますが、実は何も言う必要はないのです。「何も言わないなら、多分何もしなくなるわ」とおっしゃるかもしれません。しかし大事なものは、言葉ではないのです。そこに気がつくかどうかでお子様の態度も大きく変わってきます。子供は、何も言わなくなったお母さんの態度に必ず気づきます。それだけでも無言の指導は成功しているわけです。でもそれだけではいけません。子供が宿題でもなんでもいいので机に向かっていたら、その日の夕食をその子の好きなもの+デザート付きにしてあげてください。つまり、「自分が勉強していることはお母さんを喜ばせる」と子供にストレートに行動で伝えるのです。裏を返せば、「子供が勉強するのは当たり前」という気持ちをお母様方には捨ててほしいのです。子供がちょっとでも良かったテストのことを言ったり、机に向かっていたりしたら、本気で喜んでほしいのです。「勉強は将来のためになるから」などと遠まわしに言うのではなく、ストレートに「お母さんはあなたが勉強してくれるなら、そんなうれしいことはない」とお母さんの気持ちをまずは伝えてください。そのほうが説得力はすこぶるありますし、子供が変わるのは理屈ではなく人の心なのです。子供は好きな先生の科目は楽しんで勉強するので成績もいいものを持って帰ります。つまり、論理で子供に働きかけるのではなく、心でそして行動できちんと伝えようとするこそ子供を動かすときに非常に重要なことなのです。

考えてみてください、あなたの勤める会社の社長さんが、ちょっとしたことで心から大喜びしてくれたら、給料とは関係なく、この人のために頑張ろう！と労働意欲も高まるはずです。子供も同じなのです。一緒にいる人が喜んでくれたり、褒めてもらったりすれば、喜んで勉強するようになるものなのです。それでは、次章では、その「褒める」ということに関して書きたいと思います。

指導法～家庭編その ～

どのように子供を褒めればよいか

子供を褒めてあげて子供の能力を引き出すという手法は、今ではよく知られています。褒めることにより子供の脳では”やる気”に結びつく物質が分泌され、意欲を高める効果があることは皆さんご存知だと思います。しかし、子供を褒めることは難しいのも事実です。子供はとても鋭い感性を持っていますので、適切で上手な褒め方をしなければ、すぐ大人の気持ちをそれが真実か否かを見極めます。では、どのように褒めてあげればいいのかといいますと、まずは子供に全く期待しない心を持つということです。

褒めることそれ自体を目的として子供を褒めても子供には伝わりません。褒めるという行動はもともと「感動した結果」として自然に現れてくるべきものなのです。ですから、お子さんにはいい意味で「全く期待するのをやめて、すべてのことを当たり前だと思わない」と考えることをしてみれば、子供のする全てのことが今までとは違って見えてくるはずです。眠たい目をこすりながらも毎朝学校に行くことひとつをとっても、素晴らしいことなのです。そうすれば、学校から帰ってきた子供に純粋に「おつかれさま。がんばったね」と喜びの気持ちで、純粋に言葉を投げかけることができるのです。その延長線上に、勉強に対しても自然にほめることができるのです。

私の中学時代の恩師で、今でも尊敬している先生がいます。その先生と以前お話しする機会があったのですが、その先生が言われるには「間違いをも褒めなさい」というのです。最初はということかなと思っていましたが、つまり、「間違うまでいっただけでも立派。白紙じゃないだけ立派。本当にちんぷんかんぷんなら書けないはず。書いて間違っただけ立派だ」ということなのです。私は、なるほどなあと思いました。それから私はテストの点数ばかり見ずに答案を見て、「ここはよくこんな間違い方したね。いいよ。いい間違い方してる！」と早速実践しています。その「間違いをも褒める」というのは褒め方の真理をついていると思いました。私たちは、子供がテストで間違ったらそれには目も触れずに、まるのついているものだけを褒めようとしています。しかし、子供にしてみれば間違っただけでも、子供なりにがんばって解こうとした結果なのです。今回のテストは何点とったかなと期待まじりでテスト結果を見るのではなく、子供が必死に仕上げてきた答案用紙それ自体に目を向けることができれば、自然に「間違いをも褒める」ということができいくのだと思います。すべてを当たり前とせず、子供の目線で彼らの努力みることができるときに、初めて純粋な褒め方ができてくるのです。

指導法～家庭編その ～

お母様が子供の一番の家庭教師

この章では、私が塾で実践している指導法の中で、ご家庭でもできるものをご紹介しますと思います。つまり、お母様自身にお子様の ” 家庭教師 ” になってもらうわけです。できるだろうかと不安があるかと思いますが、勉強の事がまったく分からなくてもできるものばかりですので、お読みになられたあとに実践して頂ければ、もしかしたら今通っている塾や家庭教師などよりもお母様方のほうがいい先生となり、テストの結果も上昇するかもしれません。勉強を伸ばすには、学校や塾に任せっきりでは絶対にいけません。必ずご家庭のなんらかの協力が必要なのです。さらに言えば、お母様が以下に書いたことをしっかりと継続して実践していただく事ができれば、もう塾に通ったり家庭教師に来てもらう必要がなくなることも大いにあり得ます。

では、以下にその指導の進め方をできるだけ分かりやすく書きたいと思います。

この指導法を一言でいえば「**チェックテスト指導法**」です。

これはどういうことかと言えば、例えば子供が今日社会の平安時代を習ってきたとします。そしたらお母様その日子供が習った範囲の教科書を見ながら、教科書の中から子供に問題を出すのです。「源氏物語」を書いたのは誰ですか？といった具合でいいのです。勉強というのは分かるまでではなく、定着するまでしなければなりません。その意味で、理解が定着しているかどうかの確認作業はとても大事なもののなのです。これは他の教科でも実行できます。数学であれば、3日前に学習したページを子供に教えてもらい、そこから同じ問題を「もう一度やってみて」と解いてもらうのです。それで解けていれば定着していますのでオッケーです。もしできていなければ定着していないということですので、もう一度取り組むように伝えます。

単純ですが、このチェックテスト方式は、子供の学習の定着率が分かりますので、塾で習ったことをチェックしてみてもいいかもしれません。以前に塾で解いた、もしくは習った部分をチェックテストしてみてもあまり出来ていなければ、子供はその教科を十分には理解せずに先に進んでいることとなります。このような場合は、形だけの塾通いをしている可能性がありますので、塾の先生方にこのことを報告するだけでも、間接的ですが塾の指導に参加できることとなりますし、塾側としても子供の成績をより把握する上で非常に有効です。子供の側からすれば、勉強した後に自分の成果を確認してくれる人がいるわけですから余計に勉強に身が入ります。ある程度意欲が高くなってきた子供には、「お母さんが今日の勉強の最後にチェックテストして正解が10問中8問以下だったらご飯はまだだ

よ」などとある意味ゲーム感覚でやってみるのもいいと思います。

このチェックテスト指導法の目的は大きく分けて二つあります。

ひとつは、子供が学習した内容をわかったつもりになって先へ先へ進んでしまわないように、自分の学習の定着率を自覚させることです。

もうひとつは、子供が学習した最後にテストをすることにより、子供に短期的な目標を持たせ、学習にリズムを持たせるためであります。

何時間勉強しても大事なの中身です。勉強の後にチェックテストを行うことにより、子供に、学習時間よりも、どれだけ学習したところを2日後1週間後解けるか(=定着しているか)が大事なんだということを身を持って感じてもらうことができなければ、ただただと時間だけが過ぎていく学習から脱却して、本当に充実した密度の濃い学習ができるようになっていきます。なお、子供が理解できていない場合は、指導する必要がありますが、まずは解答や解説を見て自分で考える習慣をつけさせてください。そしてどうしても分からないところを学校の先生や塾の先生に尋ねるようにすればより効果的な学習ができていきます。私は子供たちによく言います。すぐ聞いたことはすぐ忘れる。だからまずは自分で解答・解説と照らし合わせながらよく考えてみなさいと。自分で苦労して身につけたものはなかなか忘れないものなのです。逆に分からないからといってすぐ質問したものは忘れるのも早いものなのです。もちろん適切に指導すべきところは指導しなければなりません。まずは自分でじっくり考える。この習慣を子供が会得することができればこれほど強力な勉強法はありません。

以上のようなことを、時間をかけてお子様にお話になり、そしてチェックテスト指導法を実践して頂ければ、きっと充実した家庭学習をしていくことができると思います。ただし、親子同士なのでチェックテストの時はあまり厳しくすると喧嘩になったりしますので、必ず前章で述べた「褒める」ということを忘れないでください。

「教わらなくてもできる」学習の進め方

ここまでお読みになられた皆様は、この本の題名でもある「子供に勉強は教えるな」の意図するところがお分かり頂けたかと思います。この章では、その指導法を実際に子供たちが実践する際に必要となってくる各教科の「勉強のやり方」をできるだけ詳しく書きたいと思います。以下に書きますことは、お子様自身が読んでいただくのが一番いいとは思いますが、お母様がお読みになった上でお子様にお伝えして頂いても構いません。

1) 国語

国語という教科は、全ての科目の中で最も重要だと言っても過言ではありません。英語の英訳の問題でも、その日本語が正確につかめてなくては英語にできませんし、数学の連立方程式の文章問題においても国語力・読解力がなくては立式ができません。このように、国語の力は全ての教科の基礎をなしているものなのです。

では、国語の力をどのようにつければよいかといいますと、私はより多くの本を読む以外にないと考えています。読書というのはボディープローのように後々になって効果あらわれてきますので、早急に結果をもとめるのではなく、毎日読書の習慣がつくように10分でも読書をする時間を設けて下さい。文章を読むということが大事ですので、本を買ってこなくても、学校の教科書を読むのもいいですし、学校教材のテキストに多く取り組むことも文章を読むという意味では大切です。そして、読書をする際にしてもらいたいことは、わからない言葉があったら辞書で調べるか、両親にたずねるか、学校や塾の先生に尋ねるということをしてほしいのです。もちろん、前後の関係で、わからない言葉の意味を推測しながら読み進めていくことも重要ですので、わからない言葉があったり、文章の意味がつかめないときには、何度も何度もしっかりと文章を読み込んでください。また、本を読んだあとには作文を書くようにしてください。原稿用紙一枚程度で構いません。最初のうちは、自分が本を読んで頭の中で理解したことを文章にすることがいかに難しいかを感じるでしょう。しかし実際に文字にして文章を書くことによって、読んだ内容の理解をさらに深めていくことができます。

これを継続していけば、国語の点数だけでなく、ほかの教科の点数も伸びていくことがよくあります。できるならば、読書のあとの作文は学校の先生や塾の先生に添削をしてもらおうとよりいいかもしれません。以上が国語の勉強の仕方です。

2) 社会・理科

理科と社会は7割が暗記科目です。(理科の1分野は数学の項目をご覧ください。)理科と社会に関しては次の言葉がキーワードです。それは、「きわめる」ということです。きわめる?と思われたかもしれませんが、文字通りきわめることを常に念頭において学習してもらいたいのです。きわめるというのは、例を挙げて言えば次のようなことです。

例えば社会の平安時代を学習するとしますと、まずは最初の見開き2ページを開いて下さい。そしてそこを何度も何度も読み込んで理解をします。次に理解したことを、自分なりにノートにまとめます。そして、最後にそのページに書いてあることを全て暗記するのです。太文字で書いてあるところだけでなく、歴史の流れや年表までも同じように暗記して下さい。また、周りにある写真や豆知識のような細かなところまで、しっかりと書きながら暗記をします。そして、まずはその2ページからはどんな問題がだされてもいいという位に徹底的に暗記をして下さい。それが「きわめる」ということなのです。きわめたらだれでもいいので、「このページからはどんな質問しても答えられるから、質問してみて」と言うのです。そして質問に完璧なくらいに答えることができたなら、これは結構うれしいものです。それが自信につながります。ただ、そのきわめるという作業は多くの時間を必要とする場合があります、大変かもしれません。だからこそ、きわめたときの喜びは大きいのです。よく、社会や理科はどのように暗記したらいいのか分からないという声を聞きますが、私はそのような質問には即答します。「書いて覚えるしか他には方法はないよ」と。ただ、あなたもそれは分かっているのです。早く楽に覚える方法などはありません。でも私が言った「きわめる」という感覚で勉強をすると意外と張り合いもあって楽しいものです。一度どこかをきわめることができれば、あなたは自分だけの「きわめる」という方法を習得したことになりますから、自信がつき、またそれを他の分野や教科に応用することができるのです。地道にコツコツときわめる勉強をして、徐々に、きわめる範囲を広げていってください。

ただし、ここで注意があります。それは、一度覚えても(きわめて)必ず忘れてしまうということです。忘れたときは、本当にがっかりします。でも「俺って暗記力悪いな」などと思う必要はありません。誰だって人間であれば忘れます。大事なものは、忘れたら再度暗記をします。でも1ヶ月くらいしたらまた忘れます。忘れたらまた覚えてください。でも、それを繰り返せば、きっと完全にきわめることができます。辛抱強くがんばって下さいね。「江戸時代の問題なら俺に任せろ」と言えるようになったら立派だし、カッコいいじゃないですか。暗記はしんどいけれど、きわめたときは本当に感動しますよ。ぜひ実行してください。

3) 数学

数学はできるだけ早期に様々な問題に取り組み、数を多くこなすことが最も重要です。それは、脳にできるだけ多くの刺激を与え、数学的な思考回路をつかさどる脳の部位を特に発達させる必要があるからです。では独学で数学をする場合にはどのようなことに気をつければいいのでしょうか。まずは、解いた問題は絶対に解きっぱなししてはいけません。数学をクイズのような感覚で、答えが正解だったかどうかばかりに気をとられるのではなく、なぜ間違っただのか、そして間違っただのであれば、2度と似た問題で間違っただけのないように、しっかりと解答についている解説をしっかりと理解するようにしてください。いいですか、ここでも、簡単に先生に質問する前に、じっくり考えるのですよ。すぐ質問するときよりも、十分に頭をひねって考えた後の質問のほうがよりポイントを絞った効果的な質問ができます。そして、これも他の教科と同様に1週間後、3週間後に以前間違っただけで見直しが済んでいる同じ問題にチャレンジすることをして下さい。定着しているかどうかを自己確認するためです。それで、定着率があまり良くないようだったら、その部分は適切に先生の指導を受ける必要のかもしれませんが、学校の先生や塾の先生に、そこだけを持って行って質問すればいいのです。

このように、数学も自分でほとんどは学習できます。必要なときに必要な分だけを質問できるようになれば、もうあなたは立派な学習ができてきていることでしょう。

4) 英語

英語は教科書の暗記に限ります。教科書を何度も何度も音読して下さい。一ページにつき最低でも60回は声に出して読んでください。同時通訳の神様と言われる国広先生も、新しい生徒には中学校の英語の教科書の暗記を徹底的にさせるそうです。英語は言語です。私たち日本人が、動詞とか副詞とか前置詞などの文法を習って日本語が書けたり話せたりしてきたわけじゃありませんよね。言葉なのですから、声に出すという作業は英語の力を大きく高めます。英語の学力をつけたければ、100回読めばいいのです。300回でもかまいません。読めば読むほど力がつきます。私は塾で英語の音読を推奨しており実行しています。最初は、慣れていないせいか苦労するみたいですが、私は「だまされたと思ってとにかく読んでみなさい」といいます。すると、本当に英語の力はつきますよ。文法やテキストに取り組むのは一番最後でいいのです。おそらく、音読を続けてすることができたとき、自分が文法などを考えずに問題が解けていくのに驚くことだと思います。もちろん書いて単語を暗記することも大事ですが、何度も読んだあとに単語を覚えると結構すんなり頭にはいっていくものです。これも継続が大事です。一日100回読んでみませんか？最初はきつけれど、だんだんと楽しくなってきますよ。

以上が、5教科の「独学」をする際の勉強の仕方とアドバイスです。どれも毎日少しずつでも続けることが大事ですので、最初はあまり気張らずに楽しんで「独学」をはじめてみてはいかがでしょうか？自分の本来持っている力を信じて！そして継続は力なりですよ

「教えない指導法」簡単チェックリスト

この章では、ここまで書きました私が提唱する「教えない指導法」を、実際にご家庭や指導の現場で実践して頂く際に活用しやすいように、チェックリストとしてまとめました。このページに折り目をつけていただければ、必要な時はいつでもこのページで重要な指針をチェックできるようにしています。

「子供に勉強は教えるな」指導法チェックリスト

1. 子供のテストの成績だけでその子の可能性を決めつけるな。
2. 子供が成績を伸ばすのは、どれだけ教えられたかではなく、子供自身が自分で考える事ができるということを自覚できた時である。子供に、自分の力を発揮できる環境を与えよ。
3. 指導者がするべきなのは、「教える」ことではなく、「子供の隠れた能力をいかに引き出すか」である。
4. 子供を大海に放ちなさい、そうすれば彼らは自由にのびのび本来の能力を開花させるだろう。
5. 散らかっている勉強部屋は、その子の頭の中がごちゃごちゃしているということを如実に現している。まずは部屋の整理整頓から始めなさい。
6. どんなに高価な百科事典や参考書でも使わないならどこかにしまいなさい。机の周りは、実用的でかつシンプルな状態にしておかなければならない。
7. 一度やったプリント類は反復練習という意味で非常に重要なので、「プリントの分別」を実行せよ。
8. 「勉強しなさい」とは絶対に言うな。それは、会社の社長からあなたが、年がら年中「働け、働け」と言われいるようなものだ。

9. 子供に期待せずにいるだけで、自然な褒める気持ちが言葉や行動に現れる。
10. 「間違いをも褒めなさい」を実践せよ。
11. チェックテスト指導法で、子供は見違えるように学習意欲をだす。まずは家庭にいるお母さんがチェックテスト指導法を実践するべし。
12. 分かった、理解したこと自体よりも、それがどれだけ定着しているかに目をむけよ。
13. 苦労して身につけたものはなかなか忘れることがないが、簡単に得た知識はすぐに忘れてしまう。まずはじっくりと自分で考えるという習慣をつけさせよ。
14. 課題は押しつけるのではなく、子供のしたいものから先にやらせなさい。子供の意欲を損なうことのないようにしなければならない。
15. 「教わること」だけで好成績を保っている生徒は、入試などの総合的問題で足をすくわれる。子供自身の中に彼らはよりどころを求めるような主体的で創造的な学習で総合的学力を培うべきである。
16. 常に成績がいい生徒は、「教わること」にほとんど興味がないという事実を忘れるな。
17. 子供に「無駄」という概念を実感させることが、主体的な学習の第一歩である。
18. 「教えること」により子供の「自ら考える力」を奪ってしまわないようにせよ。
19. 子供の勉強以外のあらゆる可能性を発見し引き出す目を持て。子供は自分の可能性を自分で自覚すれば、子供の意欲に働きかけ、それが、子供の学習意欲を高めることにつながる。

以上がチェックリストですが、十分に理解していただくためには、本書の各部を何度もお読みになられることを望みます。それでは、最後の章に移りたいと思います。

最後に

私はこの本で、完全に「教えること」を否定したわけではないことは、読者の皆様もご理解頂けたと思っております。「教えること」に関しては実に数多くの書物が存在します。書店の教育関連のブースをご覧になれば分かると思います。しかし、これまで「教えない」ことを主題とする本はありませんでした。子供の本来の力を信じてあげている本がいかにか少ないことか。ちっちゃな塾の普通の塾長が書いた本です。説得力に欠ける部分もあったか思います。しかし、少しでも多くの皆様が子供の本来持っている力を信じ伸ばしてあげる教育を実践されることに貢献できれば、この本の役目はそれで十分果たせたと思っております。

では、私は本業に戻ります。子供たちのチェックテストを手作りするのはとても楽しいですよ。そしてそのテストを子供たちが解けたときの表情を見るのが私の喜びの瞬間です。それでは、明日もまた生徒が来ますので、このあたりで失礼したいと思います。

えっ？この本の冒頭に書いた話で、子供にかけた「ある言葉」をお知りになりたい？

はい分かっています。その答えは次の章にあります。

では、皆様失礼します。

冒頭の話の子供にかけた言葉。

「

」

完

著者紹介

プロフィール

中川 祐樹

優喜塾塾長

昭和49年1月10日生まれ。

九州学院中学、熊本済々黌高校を卒業後大学を経て、東京で5年間教育関係の指導法を学び帰郷し自宅を使った進学塾優喜塾を設立する。

連絡先 096 - 248 - 0190